

た。また、漢字には片仮名によるふりがな、漢文には返り点送り仮名が施されている場合もあるが、それらもそのままに示した。ただし、それらの付け方は恣意的で正確に徹底されていないが、その有無誤脱もすべて底本のままである。

(5) 印刷の都合で、本文の右側に付されたふりがなを左側に移した部分がある。

一 校異はおおむね次のような方法によった。

(1) 校異は原則として底本に対し異文と認められるものについて表わすこととし、漢字と仮名の区別、仮名遣いの相違、送り仮名の過不足等については表わさない。

(2) 底本文との異なりは、底本の該当部分に傍線を付して、その右側に対応する異文を示した。

(3) 底本の一部が校合本に存在しない場合は、その部分に傍線を付して、その右側に(ナシ)とする。またそれが項目注記全体にわたる時は、煩雑を避けて傍線を付さず、右傍の()内にその旨を注記した。

(4) 底本の脱落や底本にない項目・注記・書入等を校合本によって補った場合は、その部分を「」で示し、「()」内にその旨を注記した。またその際校合本の注記や書入が底本文のどこに位置するかを示す必要のある時は、本文中の該当箇所に、印を付して示した。

一 本巻収載の文献資料の翻刻・校合・調査・閲覧・撮影等に関しては、高松宮家・宮内庁書陵部・国文学研究資料館・国立公文書館内閣文庫・国立国会図書館・九州大学附属図書館・早稲田大学図書館等のご理解あるご援助をいただいた。記して衷心より感謝の意を表する次第である。

目次

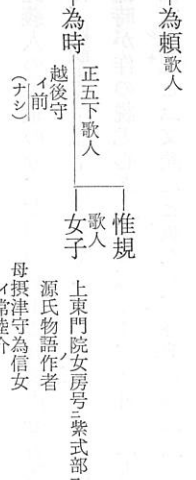
明星抄……………1

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 一 (首巻・桐壺) | 十一 (胡蝶・螢・常夏・篝火・野分) |
| 二 (帯木) | 十二 (行幸・闌・真木柱・梅枝・藤裏葉) |
| 三 (空蟬・夕顔) | 十三 (若菜上) |
| 四 (若紫・末摘花) | 十四 (若菜下) |
| 五 (紅葉賀・花宴・葵) | 十五 (柏木・横笛・鈴虫・夕霧) |
| 六 (柳・花散里) | 十六 (御法・幻・匂宮・紅梅・竹川) |
| 七 (須磨・明石) | 十七 (橋姫・椎本・総角) |
| 八 (滯標・蓬生・閑屋・絵合) | 十八 (早蕨・宿木) |
| 九 (松風・薄雲・樺) | 十九 (東屋・浮舟) |
| 十 (乙女・玉鬘・初音) | 二十 (蜻蛉・手習・夢浮橋) |

種玉編次抄……………601

雨夜談抄……………613

解題……………639



河云紫式部は鷹司殿一従一位倫子一条左大臣雅信公女官女也 相繼て陪侍上東門院^二後左衛門権介宣孝嫁大式三位弁局狭衣を生す 旧跡は正親町以南京極西類今東北院向也 此院は上東門院御所跡也 又式部か墓所は雲林院白豪院の南小野タカムラ篁が墓の西也 宇治宝蔵日記にも 紫野に雲林院有由みえたり 雲林院は淳和ナシの離宮也 榊卷に光源氏雲林院にて 六十巻と云文とかせて聞給ひし所也 式部は檀那院贈僧正許可を蒙て 天台一心三觀の血脈に入れり 兼てより紫野の雲林院の幽閑を思しめけるも 芳ゆへあるにや 又云作者観音化身也と云々

紫式部と号する事

河此物語一部の内に 紫上の事をすくれて書出せる故に 藤式部の名を改て紫式部と号せられたり 或説云一条院の御めこの子也 上東門院へまいらせらるゝとて 吾ゆかりの

れて 齋院へまいらせられけるに 法成寺ナシの入道閑白奥書を〔これは石山寺に詣て趣向を改るよし縁起にも有り云々〕所は加られけるとなり 河海にしろせる所 石山寺に通夜の時物語の趣向を忘れぬさきにとて 仏前に有ける大般若の料紙を本尊に申うけて 翻ヒルガソて須磨明石の両巻を書とめける後に 罪障懺悔の為に 般若一部六百巻を一筆に自書て奉納しける 今にかの寺にあると河海に載らる 此大般若の事は実もなき事歟と云々 般若を一筆に書はつすまじき者なれとも実説なしといへり 偕サマ此須磨の巻に源氏の左遷の事を書たる心は 西宮左大臣高明公冷泉院御代安和二年 太宰帥に左遷せられ給ひしかば 式部幼少よりなれ奉りて思歎きける比なれば 光源氏を左大臣に比し 紫上を式部か吾身によそへて 在納言菅丞相のためしを引 周公旦自居易が古を勸て趣向を書出せると云り 高明公左遷の事大元法事等云々

鴨の長明が無名抄には 大齋院より上東門院へつれなくさみぬへき物語や候とたつね申されしに 紫式部を召出して何をかまいらすべきと仰られあはせければ 珍しき物は何か侍るへき 新しく作てまいらせ給へかしと申ければ さらば作れと仰せられるを奉りて 源氏を作りけるこそいみじくめでたく侍といふ人侍れば まだ宮仕へせで里に侍りける

もの也 あはれと思召せと 申させ給ひけるに依て此名あり 武蔵野の義共義也ともいへり 紫ナシの本ゆへにむさし野 清輔説 一説云 藤式部の名幽玄ならずとて 後に藤の花の色のゆかりに紫の字に改らるゝと云り

発起

此物語の起りに付て説々ありといへとも 河海等にするせる旨尤正義たるへし 紫式部上東門院に官女として伺候のころ 上東門院へ一条院后宮大齋院より選子内親王御堂殿女村上十宮めづらかなる物語や侍ると所望申されしに うつほ竹取やうの古物語は目なれたれば 新しく作りてたてまつるべきと式部に仰られければ 即作て造ナシ之云々 定て前々連々用意歟と云々 河に註せらるゝ分は 上東門院の仰を奉て石山寺に詣て 通夜して此事を祈申すに 折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみ渡るまゝに 物語の風情心にかひければ 先須磨明石の両巻を書とどめたり 是に依て須磨の巻に今夜は十五夜なりけりとおぼし出てと書けると云々 されど石山寺に請して趣向を改よし 縁起にも有と云々 かくて其後次第に書加て五十四帖になして奉りしを 権大納言行成卿に清書させら

おり ざる物作出したるに依て 召出されて され故紫式部といふ名はつきたると申 何れかまことならんと云々

大意

此物語一部の大意面には 好色妖艶をもつて建立せりといへとも 作者の本意人をして仁義五常の道に引いれ 終には中道実相の妙理を悟らしめて 世出世の善根を成就すへしとなり されは河海にも君臣の交 仁義の道 好色の媒 菩提の縁に至る迄是を載すと云事なしといへり

先此物語の大綱莊子が寓言にもとづけり 寓言といふは己が言を他人の名を借て以て謂りとなり 莊子が法文は名を作り出して我云たき事をいはせたり 其云処はことごとく実の事なり 今此物語に云処の源氏も 其真実を尋ればその人なし 書あらはす所は実也 されば莊子が筆をまのあたりうつせり 凡莊子か文章より一切経の文章は出たりと 唐人がほめたることくに 一切の詞花言葉は此物かたりより出るなるへし

さて又人の善悪を褒貶して 此物語にしるし出せる所は 左伝を学べり 孔子の春秋をしるさるゝ心は 善をしるす所